

秀作

たかが10円、されど10円

山口県・山口大学教育学部附属山口中学校 2年 山 明日美

その女の人は、とても困惑していた。

学校から帰りのバスの中での出来事だった。バスには、私の他に10人程の乗客がいた。ぼんやりと、窓の外を眺めていると、ピンポーンと降車ベルが鳴り、スーパーの前の停留所で止まった。いつもなら1分程して、すぐに動き出すはずのバスが、止まったまま、なかなか動いてくれなかった。どうしたんだろう？と思い、前の出口の方を見ると、年配の女の人がカバンの中を真剣に探していた。携帯電話やハンカチ、ポーチ、眼鏡ケース等、カバンの中の物を全部出しながら、あせっていたのだった。

「あらっ、おかしいな。お金入れてきたつもりなのに10円足らん……。」

と、つぶやいていた。私はようやく状況が読めた。その女の人は、運賃が足りなかったのだ。

一方、運転手さんは何も言わずに、じっと前を向いたまま、お金を払ってもらうのを待っていた。10円ぐらいい許してあげたらいいのに……と思っていたが、運転手さんの立場からすれば、そうもいかないのだろう。営利目的でバスを走らせているのだから、きちんと決められた運賃を払ってもらわなければ困るのだ。ましてや、他の乗客の手前、あの女の人にだけ、特別に運賃をまけることもできない。

バスの中に、重苦しい空気が漂っていた。居眠って気付かないふりをしている人もいれば、腕時計を見ながら、時間を気にしている人もいる。私のように、成り行きを見守る人もいた。横にすわっていた友達が、
「今日、塾があるのに。遅れたら、どうしよう……。」

と、心配そうな顔でつぶやいた。

このままでは、どんどんダイヤがずれてしまう。きっと、この先のいくつかのバス停では、今か今かと、バスが来るのを待っている人もいるだろう。私は、思いきって席を立ち、その女の人に近づいて行った。

「どうされたのですか？」

と、改めて尋ねた。周囲の人の視線を感じ、少し緊張した。

「10円足りなくてね……。」

その女の人は、にじむ汗をハンカチでふきふき答えた。私は自分の財布から10

円玉を1枚取り出し、

「はい。これで降りられて下さい。」

と言って、その人に渡した。

「ごめんなさいね。有難うございます。」

と、女の人は頭を下げ、ほっと安心した表情でバスを降りて行った。ドアが閉まり、すぐにバスは動き出した。私は何だか晴れがましい気持ちだった。

以前、母がお小遣いをくれた時、

「お金には、裏と表に二通りの絵が描かれてあるやろう？ それは、お金には二通りの使い方があるからや。一つは自分のため。もう一つは他人のためなんや。」
と言っていたことを、ふと思い出した。私はこれまで、自分の欲しい物を買うために、お小遣いをもらっているのだと思っていた。それで、週1回のお小遣いは、退屈のぎに読む本やお菓子を買ったり、時には、かわいいキャラクターグッズを衝動買いしたりして、いつのまにかどこかへ消えていた。今思うと、まさに浪費だ。そのくせ、たとえ1円たりとも、他人のために使うなんて損をするみたいで、とても考えられなかった。使うとしたら、せいぜい共同募金ぐらいだった。そんな私が今回、初めて他人のためにお金を使うことができたのだ。お小遣いのたった10円で、あの女の人に喜んでもらい、運転手さんも売り上げを損せずすんだ。さらに、一緒に乗っていた人達も、バスが動いて一安心しただろう。ちょっとした勇気と気遣いで、あの10円が多くの人に役に立つことができたことを思うと、大変嬉しかった。10円で、私は大きな満足感を買うことができた。

たかが10円、されど10円である。

これからは（安いから、まあいいや。）と、自分の欲しい物を次々買うのではなく、よく考えて、人のためになるような活きたお金の使い方したいと思う。